戦時下の校長先生の証言　「教育村」東野

金子亀遊校長

東野小学校には昭和19年と20年に校長として戦争の真っ最中に勤務された金子亀遊校長は次のように綴っています。

軍人は次々と応召し、青壮年は軍需工場に動員されて、東野村は老人と女性と子どもばかりで食糧増産や軍需物資の供出に追われ、生活必需品は不足し、配給品もだんだん苦しくなって、東野村も非常に苦しい時でした。学校では教室に日の丸の額や「一億一心尽忠報国」「撃ちてし止まん」などの標語を掲げて皇国民の錬成に重点を置き、国策に従って食糧増産や軍需物資の供出に勤め、下の運動場も掘り起こして、さつまいもや大豆を作り、白坂の荒れ地を開墾したり道端を起こして大豆を蒔いたりしました。田植えや稲刈りの時は農繁休業として家の手伝いをさせたり従軍人の家に勤労奉仕に出かけさせました。夏休みには高等科の生徒を連れて早朝から花無山へ登り、太い松の幹に傷をつけて松脂を集める作業や割木を運びにも行きました。昭和19年の夏からB29爆撃機の本土空襲が始まり、子どもたちは毎日防空頭巾を肩にかけて登校しました。

昭和19年度卒業写真(中央右が金子亀遊校長)　～撮影：昭和20年3月～

10月には都市が危険になり名古屋市立御劔小学校の児童約80名が東野小学校に委託され、宗久寺に宿泊して毎日団体行動を一緒にしました。子どもたちと一緒に名古屋の空襲を眺めて、墜落する飛行機を見て万歳を叫んだことや真っ赤に染まった名古屋を見て心配をした記憶が残っています。

昭和２３年度卒業写真

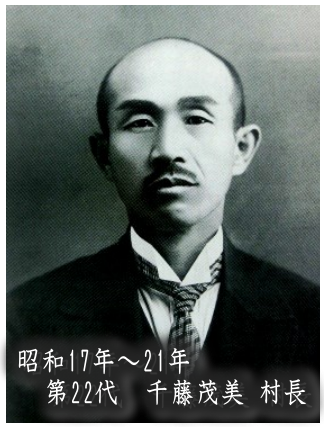
昭和２４年度卒業写真

昭和２６年度卒業写真

昭和20年8月15日はとても厳しい暑さでした。ラジオから流れる終戦の大詔を聞いて全身の力を一気に失って忙然としました。

必勝を信じて指導してきた子どもたちに何と言って詫びるのか、今後の教育をどうするのか、実に複雑で苦しい思いでした。昭和20年1月、その頃の東野村は大学卒業生の多いことは郡内（現在の恵那市内）第一位で、教育に熱心な「教育村」と言われていました。小学校の卒業生も大部分が国民の2割しか行けなかった中等学校へ進学を希望していたので、確かに「教育村」を勤務していて実感しました。したがって学校では「児童の能力を高める」ことが最も肝要でした。学力をつけるには年月を要します。その際、小学校に幼稚園を併設して満5歳児から教育を始めたいと考えました。そこで戦時保育園を開設して教育を進めることをしました。これが昭和20年4月1日のことでした。

保母（現在の保育士・幼稚園教諭）は2名を任命して東野村の5歳児は一人残らず入園しました。戦時中でくぎ1本、ガラス1枚も自由に買えないときに、校舎の一部を改造して幼児教育に力を入れたことは、東野村、そして、その時の千藤茂美村長の熱意によるものでした。


昭和17年～21年
第22代　千藤茂美 村長

昭和23年には東野中学校統合問題が起きましたが、小さな独立校としての道を村民は選びました。東野村から特別経費を計上して委託の先生を頼んで東野中学校を昭和31年4月の恵那東中学校と統合になるまで東野中学校は教育のモデル校として教育村に恥じない営みを続けました。